

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

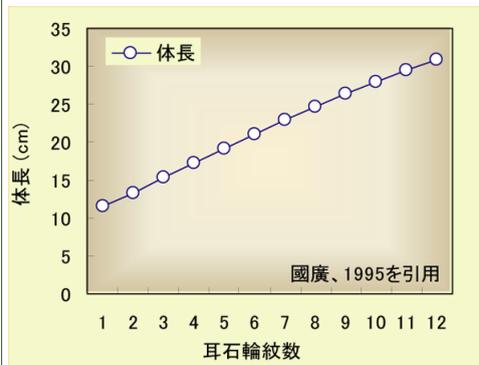
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: 不明
 産卵期・産卵場: 産卵盛期は春季(4~5月)、産卵場は不明
 索餌期・索餌場: 北見大和堆東側と知床半島周辺の大陸棚斜面に分布、主な分布水深は300~1,200m
 食性: 魚類、クモヒトデ類など
 捕食者: 不明

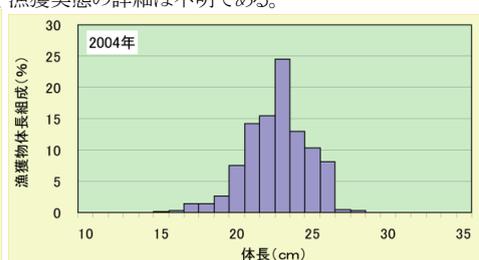
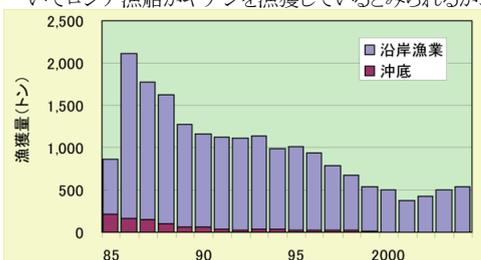


漁業の特徴

延縄、刺網などの沿岸漁業と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲されている。近年の漁獲量の大半は、沿岸漁業によるものである。

漁獲の動向

オホーツク海と根室海峡、沖底と沿岸漁業のいずれの海域、漁業においても、漁獲量は長期的には減少傾向にある。1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、1994年には1,000トンを超え、2001年には377トンまで減少した。漁獲量はその後増加傾向を示し、2004年には533トン(暫定値)となった模様である。1996年以降、オホーツク海においてロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態の詳細は不明である。



資源評価法

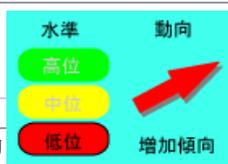
年齢と体長の関係が不明であり年齢別漁獲尾数の算出が困難であることから、コホート解析はできない。したがって、漁獲量の年変化と漁獲物の体長組成から資源を評価した。また、2000年以降のオホーツク海における沿岸漁業(知事許可漁業の延縄と刺網)の操業隻数は不変であるので、漁獲努力量が安定していると考え、2000年以降の当漁業の漁獲量を資源量指標値として用いた。

資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲量データがそろい1985年以降の20年間(1985~2004年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位と判断された。また、2001年以降の4年間の資源量指標値の変化から、資源動向は増加傾向と判断された。2003、2004年の漁獲物には、豊度の高い年級群の出現を確認できなかった。

管理方策

漁獲量、資源量指標値の変化と漁獲物の体長組成から資源状態を判断し、漁獲量に適切な係数かけた値をABCとする。資源回復を目標とした場合、現状の漁獲圧を下げる必要がある。資源の増加率1.22に、漁獲圧を下げるための係数0.9をかけた値1.1を、ABClimitの算出に用いた。資源の動向は増加傾向に変わったものの、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚が成熟するまで残り、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される。したがって今後とり得る方策としては、漁獲努力量削減はもろろであるが、加えて若齢魚の保護対策として、漁獲物のサイズ制限や、生育場の禁漁措置が必要と考えられる。



	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	586トン	1.1C2004	-	-
ABCTarget	469トン	0.8・1.1C2004	-	-

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 2001年以降の資源量指標値の変化から、資源動向は増加傾向と判断される
- 2003、2004年の漁獲物には、豊度の高い年級群の出現を確認できない

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される

資源評価は毎年更新されます。